

メイド「勇者様。ここ
が帝都一番のまんげ屋
です」

とーん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

勇者として異世界に召喚された少年は、メイドさんにある店へと案内される。

目次

聖国の聖女	1
龍王国の龍姫	7
学内三大美人	15
森の国の弓姫	28
陰毛吹雪	46
勇者とは	55

聖国の聖女

メイド「勇者様。ここが帝都一番のまんげ屋です」

勇者「まんげ屋？」

メイド「はい。ここには大陸でも名の通った女性達の下の方が売られています」

勇者「マジツすか…」

メイド「勇者様にこの世界の習わしを知っていたかどうかという陛下の考えです。では、入りましょう」

勇者「メイドさん。あの毛、1億エーンってなってますけど」

メイド「ああ。アレは聖国の聖女の陰毛ですね」

勇者「聖女…」

メイド「聖女は聖国の指導者です。1年ほど前に帝国が滅ぼした時に陛下に捕らえられました」

勇者「へえ…」

メイド「大陸でも五指に入る程美しい方で、聖国の外にも多くの信者がいました」

勇者「捕まえた後、どうしたんですか？」

メイド「国民の前で剃毛しました」

勇者「え……見てみたかった」

メイド「とても凄かったですよ」

勇者「ど、どんな感じでした？」

メイド「……………」

勇者「あ、いや、この世界の勉強のためですね、あはは」

メイド「……………そうですね、まず修道服姿で城壁の上に立たされました」

メイド「これから自分がされる事を理解していながら全く怯えず、凛々しい姿でした」

勇者「ほほう」

メイド「そこに陛下が現れました」

勇者「ゴクリ」

メイド「陛下は剃毛式の開式を宣言されると、すぐに修道服の下半分を切り取りました」

勇者「女王様、容赦無いですからね」

メイド「露わになった白い下着に男性は歓声をあげていました」

勇者「あ、剃ったのって帝国の国民の前なんですね」

メイド「いえ。聖国の都で、聖国民の前で、です」

勇者「……………そうっすか」

メイド「陛下は次に聖女の下着を脱がせました」

勇者「女王が滅ぼした国の代表の下着を剥く光景ってアホみたいですね」

メイド「この世界では珍しくありません。普通です」

勇者「はあ……平和ですね。それで？」

メイド「現れた黄金の茂みに誰もが見惚れました。あのサラサラと風に揺れる陰毛。今でも夢に見ます」

勇者「一本一億エーンの価値がある陰毛の茂みですか。マジでみたかった……」

メイド「陛下も少しだけ見惚れたあと、その陰毛に指を絡め、遊び始めました」

勇者「敵国民の前でなにやっつてんだあの人!？」

メイド「勇者様。この世界で陰毛は女性の誇りです。それを国民の前で自由に出来るということは大きな意味を持つのです」

勇者「(武士や力士の チョンマゲを触る感じだろうか)」

メイド「流石の聖女も羞恥で顔を赤くしていました」

勇者「そ、それで？」

メイド「はい。その辺りで陛下は聖女を自分の物にしたいと思いはじめてきたようですね。陰毛を撫でていた指をワレメの方へ移動させました」

勇者「ん? 『自分の物に』ってことは、つまりアレですか?」

メイド「はい。勇者様の御学友にされた様に愛撫で絶頂させる、ということですよ」

勇者「えーっと、確か敵にイカされた人は生涯その相手の物になる、みたいな習わしですよ」

メイド「はい、そうです。『陰毛を剃られた相手に二度と敵対してはいけない』『絶頂させられた敵の配下にならなければならぬ』これが習わしです」

勇者「やっぱ理解できないです」

メイド「そうでしょうか？」

メイド「陰毛を剃られる、と言うことは完全に身動きが取れず殺されて当然の状態だった、と言うことです」

メイド「それを剃毛だけで済まされるのですから二度と敵対しないのは当然では？」

勇者「な、なるほど」

メイド「絶頂したら配下に、というのも簡単なことです」

メイド「絶頂はつまり身体が屈したと言う事なんです。勇者様、敵に気持ち良くされた配下なんて、いつ快樂落ちして裏切るかわからなくないですか？」

勇者「いや、どうでしょう…」

メイド「まあ昔の人はそう考えたのですよ。そして『敵の手で絶頂する信用ならん配下は敵にやろう』と言う結論に至り、今では常識となっています」

勇者「え、いっただけで配下になった人なんて逆に信用ならなくないですか？」

メイド「昔はそうでした。ですが今、敵に絶頂させられながら配下にならないような人がいれば、敵味方問わず軽蔑されるでしょう」

勇者「怖いですね」

メイド「そうですね」

メイド「話を戻します」

メイド「陛下は指を聖女のアレメにやり、愛撫を始めました」

勇者「ゴクリ…」

メイド「赤子の様に綺麗な聖女様の秘部を陛下の指が蹂躪しました」

メイド「凜々しかった聖女も数分でメスの顔に」

勇者「俺も見たからわかる。女王様のあの指テクはヤバイ」

メイド「理性に反して、誘うように開いていく脚を涙を流しながら見つめる聖女は本当に美しかったです」

勇者「そ、それでどうなったんですか？」

メイド「5分くらいで静かにイきましたね」

勇者「じゃあ聖女は今、女王様の配下なんですか？」

メイド「いえ、その日の内に自ら命を絶ちました」

勇者「後味悪っ！」

メイド「大丈夫ですよ。聖女は死後、神に仕える運命にあります」

メイド「今も神の国で元気にやっているでしょう」

メイド「あの後、陛下は聖女の下のを全て剃りました」

勇者「(聖女のパイパン。やばい興奮する)」

メイド「そして一本一本を高値で売り捌きました」

メイド「聖女の愛液が付着していましたのでご覧の通りとんでもない値段です」

勇者「そうですか…。ん？」

メイド「どうかしましたか」

勇者「あつちに一本10億エーンの陰毛があるんですけど」

龍王国の龍姫

メイド「それは龍王国の龍姫の陰毛ですわね」

勇者「その人も美人なんですか？」

メイド「はい聖女と並ぶ美貌の持ち主です」

勇者「そんな人のまん毛なのか……。唯の毛なのに興奮するな」

メイド「勇者様のような方が多いので、まん毛屋は基本的に貴族しか利用できないのですよ」

勇者「でも、偽物の可能性もありますよね」

メイド「いえ、この世界の人は全員《鑑定》と言う魔法を使えますので」

勇者「何ですか、それ？」

メイド「眼に力を込めて《鑑定》と口にして下さい」

勇者「えつと《鑑定》……おおう」

メイド「見えましたか？」

勇者「はい。メイドさん、ルナさんって言うんですわね」

メイド「はい。自己紹介が遅れました、勇者様」

勇者「あ、俺の名前は」

メイド「存じ上げております」

勇者「あ、そうですか」

メイド「それと、私のことはこれまで通りメイドさんと呼び下さい」

勇者「わかりました」

勇者「それにしてもメイドさん」

メイド「なんでしょうか」

勇者「弓のレベルが9もありますね。凄いじゃないですか」

メイド「メイドの嗜みです」

勇者「騎士団長さんでも剣のレベル7だったのに」

メイド「勇者様。私のことは良いので陰毛に《鑑定》を使ってみて下さい」

勇者「あ、そうですね。《鑑定》」

メイド「見えましたか？」

勇者「おお、《龍王国の女王・ドーラの陰毛》って出ましたよ」

メイド「つまり、その毛は間違いなく龍姫の陰毛だと言うことです」

勇者「成る程」

メイド「……………」

勇者「……………」

メイド「……龍姫の剃毛の時のお話をすればよろしいのですか？」

勇者「お願いします、メイドさん」

メイド「わかりました。まず龍姫自身のお話から」

勇者「大陸トップクラスの美人なんですよね」

メイド「それに加え大陸最強の戦士としても知られています」

勇者「おお！よくそんな人の陰毛を……」

メイド「帝国の10人いる騎士団長全員が束になって掛かっても返り討ちにあったほどの方です」

勇者「え、あの化物達をですか?！」

メイド「はい。あの10人が秒殺でした」

勇者「すごい……」

メイド「結局、力では勝てませんでしたので陛下が罫にかけて捕らえました」

勇者「おお！そして剃毛式ですか!？」

メイド「……………はい。勇者様が大好きな剃毛式です」

勇者「(アレ?今なんか好感度下がった?)」

メイド「龍姫は鎖に繋がれ、ここ帝都で剃毛式を迎えました」

勇者「ゴクリ」

メイド「城壁に立たされた龍姫は帝都市民を睨みつけていました」

メイド「そこに陛下が現れます」

勇者「キターー!!!」

メイド「……………」（陛下が国民に大人気な理由がわかった気がします）」

メイド「陛下は龍姫の服を全て脱がせました」

勇者「……………」

メイド「……………下着はアダルトイナ黒でした」

勇者「ほほう」

メイド「龍姫の秘部を覆う毛はとても薄く、ワレメが丸見えでした。多くの人が笑って
いましたね」

勇者「?なんでですか?」

メイド「大陸最強の陰毛がそこらの少女並みに薄かったからです」

勇者「(粗チンみたいな扱いなのか?)」

メイド「龍姫も気にしていたのでしよう。無表情を貫いていましたが耳が真っ赤でした」

勇者「それは、なんと言うか、萌えますね」

メイド「ええ、可愛かったです。陛下が欲しくなってしまうくらいには」

勇者「ああ、つまり」

メイド「はい。陛下は龍姫に手マンし始めました」

勇者「武力最強vs愛撫最強ですね」

メイド「注目のカードでした」

勇者「け、結果は？」

メイド「引き分け…でしょうか」

勇者「と言うと？」

メイド「陛下のテクニツクの前に流石の龍姫も顔をとりけさせてしまいました」

勇者「ゴクリ」

メイド「か弱い乙女のように脚を震えさせ、『あ…んあ♡』と可愛い声を漏らす龍姫」

メイド「愛液も水たまりを作るほど出し、いつ絶頂を迎えてもおかしくない状態でした

…：…しかし」

勇者「何かあったんですか？」

メイド「龍王国の人間が観衆に紛れていたのです」

勇者「ああ。まあ、ありそうですね」

メイド「その者に龍姫を拘束していた鎖の一つが壊されると、残りの鎖を龍姫自身が力

づくで引きちぎったのです」

勇者「流石最強……」

メイド「そのまま龍姫は取り囲む兵をなぎ倒して逃亡しました」

勇者「ん？では、あの毛はいつ？」

メイド「陛下もただでやられる方ではありません。逃亡する龍姫とすれ違い様に彼女の陰毛に剃刀を入れたのです」

メイド「その時に剃れたのは5本だけ。習わしが適応されるか、とても微妙な数でした」

勇者「それで、どうなったんですか？」

メイド「陛下は龍姫の陰毛を五人の騎士に持たせ、龍王国の主だった都市に潜入させました」

勇者「お、おう……（絵面がひどい）」

メイド「騎士達は人が最も多くなる時間帯に都市の中心部に行き、こう叫んだと言います」

メイド「『我は帝国の騎士なり！龍姫の陰毛は我が手にあり！疑うならば《鑑定》してみよ！』」

勇者「……………」

メイド「こうして龍王国内で、龍姫が帝国の人間に剃毛されたという情報が広がり、尾

ひれがついたりして酷いことになりました」

勇者「(最低だ……)」

メイド「剃られたのが数本だと言っても証明するには龍姫が国民の前で秘部を見せなければなりません」

メイド「しかし彼女には毛が薄いと言う、見られたくない、知られたくない秘密がある」
メイド「結果、龍姫はどうすることもできず、陛下に剃毛されたという情報が広がった為、に帝国との戦争に参加できなくなりました」

勇者「それで、龍王国は？」

メイド「まだ戦争中ですが時間の問題でしょう」

勇者「もう龍姫さんが出てくることはないんですか？」

メイド「ありえませんが、出てきた場合、龍王国の国民に軽蔑されますし、下手をすれば味方に命を狙われかねません」

勇者「習わしがそんなに大切なんですか。理解出来ないですね」

メイド「『龍王国の人間は剃毛されても敵対する』なんて判断されますと、『じゃあ剃毛なんかじゃなく龍王国の兵は全員殺そう』となりかねません」

勇者「おお。なるほど」

メイド「別に習わしだから従うわけではなく、しっかりとした理由もあるんですよ」

勇者「勉強になります」

メイド「まあ、そういう訳で噂も広まり、用無しとなったその陰毛が、こうしてお店で売られているという訳です」

勇者「5本しかないから聖女より高いんですね。理解できました」

メイド「それはよかったです」

勇者「ふーん。……ん？」

メイド「どうかしましたか？」

勇者「あそこに1本を1000エーンの陰毛が……。あれ？どこかで……」

学内三大美人

メイド「あれは氷室様の陰毛ですね」

勇者「！」

勇者「アレが氷室さんのまん毛……（ゴクリ）」

メイド「勇者様。聖女達に比べると食いつきが違いますね」

勇者「当然ですよ。聖女や龍姫は所詮見たこともない他人ですから」

メイド「成る程」

勇者「それで、どうして氷室さんの陰毛がここに？それも1000エーンで」

メイド「逃がさないためですよ」

勇者「？」

メイド「あの毛を《鑑定》してみてください」

勇者「はい、《鑑定》……おおー！」

メイド「わかりましたか？」

勇者「《氷室静香の陰毛（潮付き）》って見えますよメイドさん!!」

メイド「テンション下げてください。ウザいです」

勇者「あ、はい……」

メイド「見ていただいたようにあの毛は『潮付き』です」

勇者「し、潮付きってことはつまり……」

メイド「ご想像通りです。氷室様は陛下の愛撫によって潮吹きし、それがあの陰毛についているのです」

勇者「あの学内三大美人の一人にして『氷姫』と呼ばれるクール美人の氷室さんが潮吹き……」

メイド「『鑑定』には表示されるモノとされないモノがあります」

勇者「ほう」

メイド「普通の愛液は表示されませんが潮を含め表示される物があり、陛下は偶にそれを利用されます」

勇者「と言いますと？」

メイド「潮を吹いたという事は氷室様は陛下にイカされたという事です」

勇者「それはわかります」

メイド「つまり、あの陰毛を見れば誰もが氷室という女性が陛下の配下であると判るわけです」

勇者「それが？」

メイド「この世界の人間なら兎も角、勇者様の世界の人間が『絶頂したから配下です』なんて簡単に認める訳がありません」

勇者「そうでしょうね。俺なら無視して逃げます」

メイド「その通り。しかし、あの陰毛が大陸中に晒されていたとしたらどうです？」

勇者「……どこに行っても女王様の配下だと認識される……！」

メイド「そうです。もし逃げたと分かれば迫害を受けるでしょうし、居場所がすぐに陛下に知らされます」

勇者「でも似顔絵描いて指名手配しても同じじゃ……」

メイド「それが通用するのは帝国内だけです」

勇者「あ！」

メイド「敵国の女王に誰も従いません。似顔絵なんて無視されるでしょう」

勇者「確かに」

メイド「ですがそれが習わしを無視して逃げた卑怯者だと分かれば別なのです」

勇者「潮付きの陰毛を大陸中に晒したことで逃げ場をなくしたのか……！」

メイド「氷室様もそれを理解しており、今は大人しく陛下に従っています」

勇者「ちなみに一本1000エーンなのは……」

メイド「知名度がないので当然です」

勇者「まあ、そうですね。すっごい不細工かもしれないし」

メイド「この世界でも氷室様は聖女達と並んでも見劣りしないレベルですよ」

勇者「アイドルとかより美人だったからなあ」

メイド「顔を知っている人なら3000万エーンは出すでしょう」

勇者「そうなんですか。と言うか今更ですけど、氷室さん日本に返してもらえてなかったんですね」

メイド「はい。氷室様、天野様、夜神様の御三方はまだ残られています」

勇者「見事に学内三大美人じゃないか」

メイド「他の36名の御学友は、勇者様が召喚された日の夜にニホンにお返ししました
が」

勇者「召喚か……。もう1週間前ですね。あの時はいきなり異世界に連れてこられて驚きましたよ」

メイド「そうですね。それに陛下がいきなり女生徒の方を襲い始めましたし」

勇者「山田さんとか田中さんが一瞬で裸に剥かれて手マンでイカされてたなあ」

メイド「陛下は珍しい異世界人だからと女性全員を絶頂させ、その後 気に入った御三方を残すと決めたようです」

勇者「あー。俺途中で別室に移動させられたからその3人のエロい姿見逃したんですよ

ね」

メイド「私は一部始終見させていただきました」

勇者「……………（チラツ）」

メイド「……………どなたの話から聞きたいですか？」

勇者「メイドさん愛してるー！」

勇者「えつと、じゃあ、夜神さんからお願ひします」

メイド「あの中性的な容姿で、少しミステリアスな感じの方ですか」

勇者「はい。夜神さんは本当謎が多いんですよ」

メイド「そうなのですか？」

勇者「勉強も運動も完璧だし、なんでも知ってる感じの人。だけど誰も彼女については詳しい事を知らないんですよ」

メイド「ふむ」

勇者「漫画に出てくる敵か味方が最後まで分からない強キャラってイメージだったんですよ」

メイド「よくわかりませんが、凄そうですね」

勇者「あの人が本当に陛下にイカされたんですか？」

メイド「夜神様は最も抵抗されましたよ」

勇者「抵抗ですか」

メイド「はい。まず近付いた騎士を気絶させました」

勇者「え？あの時いた騎士って…」

メイド「全員精鋭でしたね」

勇者「あの人が勇者でいいんじゃない？」

メイド「まだ序の口です」

メイド「夜神様はその後更に4人の騎士を素手で叩き潰し陛下に跳びかかりました」

勇者「うわあ…。マジで何者だよあの人」

メイド「そのまま陛下の背後を取ると、懐からナイフを取り出し陛下の首に突き付けました」

メイド「その状態で元の世界に帰すように言っていましたね」

勇者「そ、それで？」

メイド「陛下が殺気を放ったところアツサリと戦意喪失しました」

勇者「は？」

メイド「鍛えていたようですが本物の殺気を向けられたことはなかったみたいです」

メイド「余裕の表情で『おねーさん、あんまりボクを怒らせないでね♪』などと言っていったのが一転」

勇者「……………」

メイド「震えながらへたり込み失禁していました」

勇者「すんげえ、興奮しますね」

メイド「御学友の男性方は歓声をあげていました」

勇者「でしょうね！普段とのギャップがヤバすぎます」

メイド「その様ですね。結局、そのまま陛下に服を全て脱がされ、されるがまま何度もイカされてましたよ」

勇者「女王様がチート過ぎる…！」

メイド「あ、そういえば無毛でしたね。それを見て陛下が『お前はギャップの塊か』と笑っていました」

勇者「……………見たかった」

メイド「そのウチ見れますよ。昨日見た時はキャンキャン鳴きながら陛下の足を舐めていましたし」

勇者「城に帰ったら俺も見れるよう女王様に掛け合って下さい」

メイド「嫌です。さあ、次はどちらですか？」

勇者「じゃあ天野さんで」

メイド「純真そうで天使の様な方ですね」

勇者「はい。あの子は俺の癒しでした」

メイド「そうですか」

メイド「天野様は夜神様の直後でしたね。そのお陰で大分怖がっていたようです」

勇者「飛んで行って頭撫でてあげたい」

メイド「陛下がスカートを脱がし天野様の白い下着が露わになりました」

勇者「天野さんには白しかありませんからね」

メイド「そういう決め付けはやめた方がいいですよ」

勇者「メイドさんは水色って感じですね！」

メイド「……天野様の話に戻ります」

メイド「陛下は小動物のように怯える天野様をジワジワといじめ始めました」

勇者「ふむふむ」

メイド「お尻を撫でたり、下着を引っ張って中を覗き込んだりし、天野様の反応を楽し

んでいました」

勇者「(ゴクリ)」

メイド「そうして焦らしながら数分が経過した頃、天野様の下着に小さなシミが出来て

きました」

勇者「ぬ、濡れたんですか！あの天使が……！」

メイド「女性に理想を押し付けるのはやめてください。アレは誰であれ感じます」

勇者「同じ事されたらメイドさんでもパンツにシミ作っちゃうんですか？」

メイド「少し調子に乗り始めましたね、勇者様」

勇者「あ、すみません。メイドさんの話がエロくてつい興奮しちゃいました」

メイド「今回だけ聞き流してあげます」

勇者「それでシミができたあとは？」

メイド「下着の上から愛撫しシミを広げていました」

勇者「ほうほう」

メイド「その後下着を膝の辺りまで下ろし、イクまで秘部を刺激していましたね」

勇者「……………」

メイド「……………陰毛は少なめですが生えていましたよ」

勇者「成る程。夜神さんには生えてなくて、あの天使ちゃんには生えていたんですね」

メイド「勇者様の御学友も天野様に陰毛が生えていたことを驚かれました」

勇者「でしょうね」

メイド「まあ、それも陛下に剃られて今では勇者様の妄想通りになっていますけど」

勇者「そ、それで天野さんはどんな感じでイッたんですか？」

メイド「そうですね。確か、両手で口を押さえて声が出ないようにされていたかと」

勇者「か、可愛い」

メイド「イツた後は、痙攣しながら潮を吹く自らの下半身を驚いた様子で眺めていました」

勇者「あの天野さんが潮吹きとか…。見た奴ら一生オカズにするだろうなあ」

メイド「……………」

勇者「……………（チラツ）」

メイド「最後は氷室様ですわね」

勇者「お願いします」

メイド「氷室様は最後まで表情を変えませんでしたね」

勇者「女王様でもあの無表情は崩せなかつたんですか」

メイド「はい。下半身を裸にされ、無理やり脚を開かされ、秘部を蹂躪されても氷の様な無表情でした」

勇者「それで？」

メイド「どうかその表情を変えようと陛下は様々な方法をとりました」

勇者「（ゴクリ）」

メイド「男性の目の前に移動させたり、お尻の穴を弄ったり」

勇者「なんと」

メイド「結局、五度イッても大して表情を変えなかった氷室様に陛下も諦めていました」
勇者「氷室さんの他の表情みたいなあ」

メイド「私も邪な気持ちなしに見てみたいです」

勇者「それでイッた時どんな様子でした？」

メイド「誇り高い騎士の様でしたよ。イッても決して膝をつきませんでした。結局、最後に剃毛され終わったと同時に気絶するまで自分の意地を貫きましたね」

勇者「カツコイイですね…」

メイド「はい」

勇者「氷室さんの陰毛買っておくことにします」

メイド「では、私も」

勇者「すいませーん！」

店主「はいはい」

勇者「この陰毛を2本下さい」

店主「2000エーンですね、ありがとうございます」

勇者「1番安いのですいません」

店主「いやいや、構いませんよ。そちのメイドさんの話のおかげでさつき聖女様と龍姫様の陰毛が売れましたしね」

勇者「あーなるほど。1番高い2つが売れたんですか。よかったですね」

店主「ふふふ。実はウチにはもっと高い陰毛があるんですよ」

勇者「マジっすか」

店主「奥にしまつてあるんですけどね、特別にお見せしましょうか？」

勇者「お願いします！」

店主「待つて下さい」

メイド「……………」

勇者「メイドさん、どうかしました？」

メイド「い、いえっ、なんでもありません」

勇者「そうですか？ならいいんですけど」

店主「お待ちせしました、これがウチの最高の陰毛です」

勇者「一本30億エーンですか…。いや、確かにそれだけの価値はありそうな美しい毛ですわね」

店主「ええ、森の国の王女で、聖女様や龍姫様と並ぶ美姫の陰毛なんですよ」

勇者「へえ、あ、《鑑定》してみてもいいですか？」

店主「どうぞどうぞ」

メイド「……………」

勇者「《鑑定》……ふむふむ《弓姫・ルナの陰毛（潮付き）》か。ん？この名前どこかで……」

森の国の弓姫

メイド「……………」

勇者「メイドさんどこに行くんですか？」

メイド「後生です。手を離してください勇者様」

勇者「いきなりどうしたんですか」

メイド「……勇者様、何ニヤニヤしているんですか……！」

勇者「え？すみませんルナさ…メイドさん」

メイド「ワザとですよね……！」

勇者「何のことだかさっぱりです」

メイド「……………」

勇者「しっかし、まさかメイドさんの潮付き陰毛まで売ってあるなんて驚きですね」

メイド「……………くっ」

勇者「本人の前でその陰毛を見るのって凄く興奮しますね、メイドさん」

メイド「……全裸の視姦をされてる気分です」

勇者「綺麗な銀色ですね」

メイド「……ありがとうございます」

勇者「ん？と言うかメイドさんって今無毛なんですか？」

メイド「……黙秘します」

勇者「毛の薄い龍姫を馬鹿にしていた人が無毛だなんてこと、ないですよね」

メイド「……顔を近づけないで下さい。キモいです」

勇者「ははは、すみませんメイドさん」

メイド「……」

店主「なんで弓姫様の陰毛に頭下げてるんですか？お客さん」

勇者「おっと、間違えました」

メイド「……勇者様、そろそろお城に帰りましょう」

勇者「勉強熱心な勇者様はもう少しこの世界の歴史を学びたいです」

メイド「……絶対話しませんよ？」

勇者「あ、店主さん。弓姫様について教えてもらえませんか？」

メイド「！」

店主「ええ構いませんよ。ご希望でしたら弓姫様の剃毛の時の話もしますけど」

メイド「なっ……！」

勇者「見たんですか店主さん!!」

店主「当時から帝都にいる男の多くが弓姫様の陰毛を見たことも触ったこともあるでしょうね」

勇者「ほっほーう。気になりますねえ」

メイド「勇者様 先に城に帰らせて頂きますね」

勇者「……………」ガシツ

メイド「……くつ、離してください変態勇者……！」

勇者「ところで店主さん。このメイドさんどう思います？」

店主「弓姫様に似て美しいですね。いや羨ましい！」

勇者「はっはっは。もしかしたら本人かも知れませんか？」

店主「ははは。それはないでしょう」

勇者「どうしてですか？」

店主「弓姫様が陛下のお気に入りだつてことは有名ですからね。3年前から常に側に置いておられるとか」

勇者「ほっほーう」

店主「ほんの1週間前にもベッドの上で陛下に鳴かされていたそうです」

勇者「なるほどなるほど」

店主「まあ、そんな訳で陛下が他のお気に入りを見つけてもしない限り弓姫様が陛下の

そばを離れることはないんですよ」

勇者「よくわかりました……………」（チラツ）

メイド「……………なんですか」

勇者「氷室さん達に負けちゃったんですねメイドさん（小声）」

メイド「殺しますよ」

勇者「じよ、冗談です……！」

メイド「はあ……。私が陛下のそばを離れたかったので自分からお願ひしたのです」

勇者「そうですか」

店主「小声で話してますけど、どうかされましたか？」

勇者「いや、なんでもないですよ」

店主「それで弓姫様の話聞きますか？」

勇者「お願いします！」

メイド「は、離してください、この……！」

店主「では、まず弓姫自身の話から」

店主「弓姫様は陛下の長年のライバルとして知られています」

勇者「ほう」

店主「陛下以外と言われる知将であり、同時に100メートル距離があれば龍姫様でも

勝てないと言われるほどの弓の名手」

勇者「マジか」

店主「実際、弓姫様に多くの英雄が敗れました」

店主「月の国の双子姫、夜の国の吸血姫、魔国の女魔王、妖精国の妖精姫。いずれも陛下でさえ手を焼いた英傑達でした」

勇者「サラツと魔王が入ってて怖い」

店主「4年前には陛下の妹君であるマイン様も捕らえられました」

勇者「どうなったんですか？」

店主「双子姫も吸血姫も魔王も妖精姫も、そしてマイン様も公開剃毛でツルツルマンコにされてしまいました」

勇者「肩書きだけで美人だとわかる人達のツルツルマンコ……!」

店主「吸血姫と妖精姫の剃毛式を見に行きました^がヤバかったです」

勇者「その話も聞きたいですけど、とりあえず続けて下さい」

店主「はい。その後、陛下と仲が悪かった弓姫様はマイン様を下半身裸の状態で広場に晒し者にしました」

勇者「そ、それで？」

店主「弓姫様は心身ともに疲れ切ったマイン様を愛撫でイかせたとか」

勇者「弓姫様って酷い人ですね。ねえメイドさん」

メイド「……………この世界では普通かと」

店主「とまあ、そんなこんなで弓姫様は大陸最高の英雄と呼ばれる様になり、大陸統一も時間の問題だと思われました」

勇者「だけど、その陰毛が売られているということは…」

店主「はい。我らが陛下がやってくれました」

勇者「キターー!!!」

メイド「……………」モゾモゾ

勇者「股を擦り合わせてどうかしましたか、メイドさん？」

メイド「き、気にしないで下さい」

勇者「ふーん」

勇者「店主さん、それで陛下はどうやって弓姫を倒したんですか？」

店主「陛下はそれまで弓姫様と一対一の競い合いに固執していました」

勇者「プライド高そうですね」

店主「はい。ですがメイン様が奪われてしまい、そうは言っていられなくなったのです」

勇者「なるほど」

店主「陛下は周辺7ヶ国と同盟を結び一斉攻撃を始めました」

勇者「流石に1国では相手にできなかつたんですね」

店主「いいえ。それだけでは勝負はわかりませんでした」

メイド「森の国は自然の要塞。大国の7つや8つどうとでもなりました」

勇者「じゃあ他に何かあつたんですか？」

メイド「……………」ムスツ

店主「森の国の貴族達が裏切つたんですよ」

勇者「ど、どうしてです？」

店主「弓姫様は美しく、賢く、強かつた。誰もが惹かれてしまう程に」

勇者「それが？」

店主「惹かれ過ぎたんですよ。それこそ、その陰毛一本欲しさに国を裏切ろうと考える者が続出するくらいには」

勇者「は？」

店主「戦後、剃り落とされた弓姫様の陰毛は全て陛下が手にしました」

店主「しかし、偶に出てくるそうですよ。裏切つた貴族達の屋敷から、弓姫様の陰毛がね……」

勇者「…………アホか、この世界は」

メイド「あいつら絶対許しません……」

店主「では、剃毛の時の話をしましょうか」

勇者「待ってました!」

メイド「勇者様!これくらいに…!」

勇者「はあ……。メイドさん」

メイド「勇者様…」

勇者「俺はメイドさんの全てが知りたいんです」

メイド「気持ち悪い…!」

勇者「下着の色、陰毛の具合、イキ方、全て知りたい!」

メイド「やっぱり私だけに帰ります…!」

勇者「本人が隣にいるという最高のスパイスを逃すかああ!!」ガシツ

メイド「くっ…!いつか絶対殺します…!」

勇者「弓姫も弓なしだと無力なお姫様なんですネ」

メイド「~~~~~っ!!」

店主「いいですか?」

勇者「はい!じっくりねっちよりお願いします!」

店主「わかりました」

店主「まず、陛下は相当お怒りでした」

勇者「まあ、妹が辱めを受けた訳ですからね」

店主「その通りです。ゆえに陛下はメイン様がされた以上に弓姫様を辱めることにしました」

勇者「おお！期待！」

メイド「あー！あー！私には何も聞こえません！」

店主「……………」

勇者「……メイドさん偶にこうなるんですよ」

店主「はあ」

勇者「どうぞ続きを」

店主「……陛下は捕らえた弓姫様を帝都の広場に連れて行きました」

勇者「ふむふむ」

店主「弓姫様は純白のドレス姿で私達帝都の民の前に姿を現しました」

勇者「ああ、似合いそうですね」

店主「ええ。女神かと思いましたよ」

勇者「それで？」

店主「その後現れた陛下にドレスを捲られましたね」

勇者「ほほう！下着の色は？」

店主「水色のシンプルなモノでした」

勇者「続けて下さい」

店主「陛下は下着の上から手マンを始め、あつと言う間に弓姫様をイかせてしまいました」

勇者「は？」

メイド「だって……あ、あんなの……」

店主「30秒くらいでしたね。皆 失笑していました」

勇者「それは恥ずかしいですね……」チラッ

メイド「~~~~~っ!」

店主『あ、いやっ♡な、なんですかこれえっ!!』って言ってたので、いったの初めてだったんじゃないですかね」

勇者「声真似やめてください」

店主「これは失礼」

店主「まあ結局、1分足らずで下着はビチャビチャになってました」

勇者「(ゴクリ)」

店主「次に陛下は弓姫様の下着を脱がし、私達が見やすいようにガニ股にして下さいました」

勇者「ガニ股ですか!!」

店主「騎士二人掛かりで肩幅以上に開かせましてね、とても情けない姿でした」

勇者「ドレス姿なのに下半身裸でガニ股ですか…。くそエロいですね」

店主「顔を見られまいと必死に背ける姿もそりましたな」

勇者「ほっほーう」

メイド「……………」クルツ

勇者「(ああ、こんな感じか)」

店主「それで脚開いてるモノですから、おマンコが良く見えましてね」

勇者「毛はどうでした？」

店主「銀色の陰毛が愛液で濡れて光っていました」

勇者「それは見てみたかったです」

店主「魔法の剃刀で剃ってましたからね。陛下でさえ、もう二度と見れませんよ」

勇者「魔法の剃刀？」

店主「ええ。クリームなしに剃り残しなく剃れて、二度と生えなくする魔法道具です」

勇者「(それで3年経ったのに無毛なのかメイドさん)」

メイド「……………」シヨボン

勇者「それでガニ股の後は？」

店主「気絶するまで何度もイかせてました」

勇者「なるほどなるほど」

店主「敏感な所を触られる度に可愛らしい嬌声をあげていて、その声だけで下の方が硬くなりましたよ。ははは」

勇者「後半の情報いらんわ」

メイド「……3年も経っているのに」ボソツ

勇者「ねえねえメイドさん」

メイド「……なんですか、勇者様」

勇者「その嬌声ってどんな感じだったんですかね」

メイド「さ、さあ……?」

勇者「ちよつと試しにやってみてくれませんか?」

メイド「……嫌です」

勇者「……『30秒でイカされた弓姫がここにいるぞー!』って叫んでいいですかね?」ニヤニヤ

メイド「……40秒は持ちました」

勇者「ふーん」

メイド「……」

勇者「5……4……3……2……」

メイド「わ、わかりましたっ……!」

勇者「じゃあ、小声でいいんで、どうぞ」

メイド「……………『あつ…、ああんっ♡……い、イクウっ!!』……………」

勇者「……メイドさん」

メイド「……はい」

勇者「結婚してください!!」

メイド「死んで下さい」

店主「ははは。続きますか?」

勇者「情けなく気絶した弓姫のその後お願いします」

メイド「……………」

勇者「あいたつ。ちょ、メイドさん、蹴らないでっ」

メイド「ふんっ」

店主「ははは。弓姫様が気絶して、その日は解散になりました」

勇者「まだ剃毛されないのか」

店主「まだですね。翌日、弓姫様は広場に縛り付けにされ、晒されました」

勇者「マイン様の仕返しですね」

店主「ええ。そして全裸にされ身動きの取れなくなった弓姫様の隣で、陛下がこう言われました」

店主「『帝国民は1人5秒だけ弓姫の身体に触れる事を許可する』と」

勇者「うおお！マジか女王様！」

店主「マジでしたよ。あつと言う間に長蛇の列が出来ました」

勇者「でしようね」

メイド「お、思い出したくないです……」プルプル

店主「マン毛を撫でる者、乳首を引っ張る者、手マンする者、皆思い思いにその5秒間を味わいました」

勇者「店主さんは何したんですか？」

店主「私は勃起していたクリトリスを摘ませてもらいましたよ、へへへ」

勇者「……覚えてますか？メイドさん」

メイド「……痛かったです」

勇者「なるほど」

店主「その次の日は陛下が弓姫様に首輪をつないで散歩して回りましたね」

勇者「ああ、奴隷と主人みたいな感じですね」

店主「いえ、犬の首輪をつけて4足歩行させていました」

勇者「ほっほーう」

勇者「もしかして犬の鳴き真似させたりとか…」

店主「ええ、してましたよ」

勇者「なるほどなるほど」

メイド「……………」

勇者「メイドさんメイドさん」

メイド「……………」

勇者「5……4……3……」

メイド「『キャンキャンッ……クウく〜ん!』……………こ、これで満足ですか、クソ勇者様」

勇者「何も言っていないのに犬の鳴き真似するなんて。ドン引きですよメイドさん」

メイド「ガルルルウー……!!!」

勇者「メイドさんは無視して続きをお願いします」

店主「あ、はい。えっと最後にあったのが剃毛式です」

勇者「おお、遂に!」

店主「城壁の上で弓姫様は秘部を突き出すようなポーズを取らされました」

勇者「(ゴクリ)」

店主「陛下の持つ剃刀が弓姫様の陰毛を剃っていきます」

勇者「ふむふむ」

店主「皆静かに剃毛の様子を眺めていました」

店主「ジョリ…ジョリ…という音が民の耳に届きます」

メイド「あ、あう…」

店主「哀しそうに、剃られていく自らの陰毛を見つめる弓姫様」

店主「数秒後、最後の一本まで剃られ、ツルツルになった弓姫様のおマンコが晒されました」

勇者「なんか俺 感動してる…」

店主「その瞬間民は大歓声をあげました」

店主「当然です。陛下の長年の敵が、その誇りを奪われたのですから」

勇者「拍手」パチパチパチ

店主「その後に陛下は弓姫様を愛撫し絶頂をさせました」

勇者「流れるようにイカされる弓姫様」ぷっ

店主「弓姫様は大きな声をあげて潮を吹き、陛下はその潮を陰毛に付けました」

勇者「おお。それで《潮付き》か」

店主「弓姫様の陰毛は陛下の名を広めるために、大陸中で晒されました」

店主「そのため、大陸の人間なら子供でも弓姫様が陛下に潮吹きさせられたと知っているでしょう」

勇者「ありがとうございます！ 凄い興奮しました！」

店主「どういたしました」

勇者「ところで、どうして弓姫様の陰毛は聖女や龍姫より高いんですか？」

店主「弓姫様は大陸五指の美貌を持ち、英雄としては間違いなく頂点でした」

勇者「はい」

店主「それだけで10億の価値はあつたでしょう」

店主「加えて、英雄の《潮付き》ですから、価値が跳ね上がったんですよ」

勇者「んー？」

店主「普通、英雄はどれだけ愛撫されても潮を吹いたりしません。小娘じゃないんですから」

勇者「なるほど。ただの英雄の《潮付き》でもあり得ないのに、それが最高の英雄だったから希少だということですね」

メイド「潮を吹くのに英雄も町娘も差はありません……！」

勇者「はいはい」

勇者「それじゃ今日はこれで失礼しますね」

店主 「また来てくださいね」
勇者 「はい」

陰毛吹雪

―帰り道―

勇者「いやーこの世界についてよくわかりましたね」

メイド「……………よかったですね、勇者様」

勇者「また行きましようね」

メイド「死んでもお断りです」

勇者「あはは。残念です。……………ん？何だこれ」

メイド「どうかしましたか？」

勇者「なんか毛がいつぱい風に飛ばされてきたんですけど」

メイド「なんでしょうね。《鑑定》してみてもどうですか？」

勇者「そうですね。《鑑定》……………な！」

勇者「《帝国騎士・アリアの陰毛》《帝国騎士・ユリエの陰毛》《帝国侍女・ナナの陰毛》

《帝国騎士団長・ユリーの陰毛》これ全部別々の人の陰毛です！」

メイド「これはまさか……………陰毛吹雪……」

勇者「陰毛吹雪?!」

メイド「舞っているのは全て帝国側の陰毛ですか……これはマズイです」

勇者「あのメイドさん？陰毛吹雪ってなんですか？」

メイド「……陰毛吹雪とは見た通り多くの人の陰毛が風に舞っている様子を言います」

勇者「はあ」

メイド「主に城や砦が落とされた時に見られます」

勇者「どういうことですか？」

メイド「敗れた騎士達が剃毛され、その毛が風に飛ばされているんですよ……！」

勇者「な?!」

メイド「急ぎましょう」

勇者「はい！」

メイド「城近くの民も被害にあってますね……！」

勇者「助けなくていいんですか？」

メイド「無力な民が殺されることはありません。今は陛下の安否だけ気にして下さい」

勇者「あ、看板娘のレアちゃんが剃毛されてる」

メイド「……………」

勇者「パンツはピンクで毛は薄めか。いいもん見た」

メイド「……………」

勇者「あ、孤児院のマリアさん。相変わらずいい身体してるなあ
メイド「……………」

勇者「うおおお！エロい下着履いてるなあ……………あ、イッた」

メイド「……………勇者様？」

勇者「急ぎますよメイドさん！」

メイド「……………はい」

ー　　タツタツタツ

勇者「そういえば　メイドさん、敵に心当たりは？」

メイド「あります」

勇者「どんな人ですか？」

メイド「東にある超帝国。その女帝です」

勇者「超帝国ですか……………凄そうですね」

メイド「今の女帝になってから勢いを増している国です」

勇者「ふむふむ」

メイド「大陸五指の美貌を持つ《英雄殺し・セイ》。陛下なら大丈夫だと思いますが油断
出来ません」

勇者「あの人なら心配するだけ無駄でしょう」

メイド「……そうですね」

勇者「お、城に着きましたね」

メイド「このまま陛下の部屋まで行きますよ」

勇者「了解です」

——城内——

メイド「勇者様隠れてくださいっ」

勇者「……あれは、いつも俺を冷たい目で睨んでくるメイド長さんっ」

メイド「メイド長……」

—————

メイド長「……や、やめっ………あ、あああつ!!…イ、イクウウウっ♡♡!!!」

敵兵「あははは!生意気言つてたのにこのザマなの?」

メイド長「あ、あああ♡♡♡だ、だめえ♡……!!!」

—————

メイド「くっ……。もう手遅れです」

勇者「ご馳走様ですメイド長」

メイド「早く行きますよっ」

ー タツタツタツ

勇者「アレは、騎士団長さん?!」

メイド「サラ団長まで……」

ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー

団長「や、止めてくれ!そこはっ……。!!」

敵兵2「うふふ。サラサラのマン毛とお別れしなさい」

団長「あ、ああ!私の誇りが……。っ!」

敵兵2「あらあら。可愛いらしいパイパンになったわねえ」

団長「あ、ダメっ／＼……。そこはっ……。♡」

ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー

メイド「まさか団長まで負けるなんて……」

勇者「団長さん、あなたのパイパンめちやエロいですよ……！（小声）
メイド「行きましょう……！」

勇者「うす！楽しみです」

ーータツタツタツ

メイド「止まってください」

勇者「今度は誰だろ」

メイド「アレは夜神様と天野様……！」

勇者「おお！全裸だ……！」

—————

夜神「あんっ♡……ボ、ボクのクリトリスで……遊ぶなあ………
／／／

敵兵3「こんなに大きくしちやって。カワイー♪」

天野「ひっ……や、やめてください……いや……あっ♡……」

敵兵4「あーあ。愛液で私の手がビチャビチャ。いけない子ね♡」

—————

勇者「敵兵さん、エロいお姉さんばっかりな気がするんですけど」

メイド「気のせいです」

勇者「だといいんですけどね」

メイド「もう直ぐ陛下の部屋です…！行きますよ」

勇者「はい」

ー タツタツタツ

勇者「ん？あれは氷室さんか」

メイド「敵は1人。陛下の部屋に行くには戦うしかなさそうですね」

勇者「メイドさん勝てそうですか？」

メイド「………弓を取ってきます」

勇者「いつてらー。………さて観察しますかね」

ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー

氷室「………はあはあ………んっ………／／／」

敵兵「んー。声我慢しないでいいのよ？」

氷室「我慢なんて………んっ………していませんっ………」

敵兵「いきまくってるのによく言うわあ」

氷室「あ………それ………ダメっ………／／／」

敵兵「ふふっ。お尻の穴が大好きみたいね♡」

氷室「やつ……そこ、ちが……あ、ああ……／＼／＼」

敵兵「やつと可愛い声出してくれたわね♪」

氷室「あ、あああつ……ダメなのに……く、くるっ……♡」

敵兵「思いつきりイキなさい」

氷室「やあつ♡ああんっ……ダメえ……／＼／＼……イクっ、イツちや——アレ？」

敵兵「グハッ」

—————

メイド「勇者様、倒しました」

勇者「あと3秒くらい待つて欲しかったです」

メイド「言つてないで早く行きますよ」

氷室「はあ……はあ……勇者君？」

勇者「助けに来たよ氷室さん」

メイド「敵を倒したのは私です」

氷室「はあ……はあ……私はいから先に行つて……」

勇者「氷室さんをこのまま置いておけないよ」

氷室「奥で女王様が敵の王様と一対一で闘ってるはずなの……!」
メイド「!……………勇者様、いきましよう!」

勇者「え、でも」

メイド「早く!」

勇者「は、はい。氷室さん、すぐ迎えに来るからね」

ーータツタツタツ

勇者「どうしたんですか?メイドさん」

メイド「……………」

勇者「一対一なら女王様が負けるなんて考えられないんですけど」

メイド「私もそう信じたいです」

勇者「心配性ですね」

??「……………」

勇者「……………?なんか女性の声が聞こえてきましたよ」

メイド「こ、この声は……!」

勇者とは

勇者「これ嬌声？はあ〜〜…」

勇者「やっぱあの人、敵の王様をイかせて遊んでるんじゃないですか」

メイド「勇者様……これは……」

勇者「行きますよメイドさん」

??『だめえっ♡やめへえっ!!それ駄目なおおっ!♡ 駄目になるっ、わだじっ、駄

目になっちや、あああ!!!』

勇者「うはー!凄いな」

メイド「やはりこの声は……」

勇者「ドア開けますよ」

メイド「待って下さい……!」

勇者「?どうしました?」

メイド「ドアは、中に気付かれない様に少しだけ開けるようにして下さい」

勇者「? わかりました」

メイド「開けましたね。では隙間からそーっと見て下さい」

勇者「はあ。……………え？」

メイド「何が見えますか…？」

勇者「女王様が……………レイプされてる…？」

メイド「やはりですか……………」

メイド「私にも見せて下さい」

——室内——

女王「アアアあああ!!、ダメえっ♡、イってる!!私、イってるのおおお!!」

セイ「フンっ。愛撫王などと呼ばれていたから期待していたが、このザマか」

女王「許してくださいイイイイ!!、わだしはっ、ただのっ♡、勘違いしたっ♡、小娘でしたあああ!!」

セイ「お前、最初に私に何と言ったか覚えてるか？」

女王「まだイクウ♡!!!……………はあはあ……………や、やめてえ……………」

セイ「『私とサシでやろうとは、思い上がったな三下』……………そう言っていたな」

女王「すびませええん!!!お、思い上がったのはっ、わたしっ、でしたっ、あ、ああああ♡♡♡」

セイ「あの弓姫を屈服させた英雄？私に処女を奪われ、顔を涙と鼻水で汚している無様

なメスか？」

女王「あつ、ダメえっ!!クリトリスはやめてえええ!!」

セイ「男性器の様に勃起させて、この淫乱が」

女王「イックウウー!!!」ブシャー

セイ「潮まで吹いたか!!」

女王「ゆ、許してくらさああい……♡」

セイ「愛撫王の《潮付き》の陰毛か、それなりに高値が付くだろうな」ジヨリジヨリ

女王「……はあ……はあ……わ、私の陰毛……」

セイ「フツ。無様なお前には無毛のマンコがよく似合う」

女王「あつ♡やつ、う、動かないでっ、んっ♡♡♡」

セイ「ふふ。私の男性器にキスをして頼んでみる」

女王「は、はい♡……チュツ……も、もう、お許し下さい……／＼／＼」

セイ「はっはっはっ!プライドを棄てたかメス犬!そんな奴は私が躡けてやる」

パシーーン!

女王「アウツ!」

セイ「犬なら犬らしく鳴け」

パシーーン!

女王「キャ、キャウーーンッ！」

セイ「ふはははは!!」

パシーーン!

女王「アウーーン!!」

セイ「でかいケツをしよって！」

パシーーン!

女王「クウ〜ン!!」

セイ「もつとケツを振れ犬！」

パシーーン!!

〜
〜
〜

勇者「な、なんだあれ」

メイド「陛下は完全に心を折られていますね」

勇者「あの美人さん、なんかチンコついてるんですけど…」

メイド「彼女は両性。男性器と女性器の両方を持つ人間です」

勇者「フタナリですね」

メイド「……勇者様。見つかる前に脱出しましょう」

勇者「え？」

メイド「私の支配者である陛下がイカされた以上、私の新たな主はセイです」

勇者「あ、そういう仕組みなんですな」

メイド「はい。今彼女に見つかれば、命令されるままに犯され、陛下と並んで啼くハメになるでしょう…」

勇者「なるほど」

メイド「一旦撤退して体勢を立て直します」

勇者「わかりました」

メイド「では行きます」

ーッタツタツ

勇者「アレ？氷室さんがいない」

メイド「私が倒した敵もいませんね。恐らく敵の増援に連れて行かれたのかと」

勇者「マジか。約束やぶっちゃったな」

メイド「セイを倒して迎えに行きましょう」

勇者「おお、頼もしい」

メイド「何を言ってるんですか。セイを倒すのは勇者様ですよ」

勇者「え？メイドさんが弓で倒すんじゃないんですか？」

メイド「さつき言った筈です。私はもうセイの配下だと」

勇者「あ」

メイド「勇者様のサポート程度なら兎も角、直接弓引けば後世にまで私の汚名が残ります」

勇者「なるほど」

勇者「でも俺があの人を倒せるんですか？」

メイド「ふふ。そもそも勇者様を召喚したのはセイ対策ですよ？」

勇者「え？」

メイド「ですから倒して貰わなければ困ります」

勇者「……………」

メイド「早く行きましょう。大丈夫です。必ず勝てます」

——宿屋——

メイド「セイについて説明しますね」

勇者「はい」

メイド「彼女はこれまで多くの人間を犯し屈服させてきました」

勇者「あの巨根ですね」

メイド「はい。女性は男性器で、男性は女性器で犯しこれまで無敗」

メイド「彼女の巨根で貫かれてイかなかった者はいないそうです」

勇者「マジっすか」

メイド「実際あの陛下でさえ貫かれてしまったては指テクを披露する暇もなかったようですよ」

勇者「そんなんどうすれば……」

メイド「確かにセイの男性器は無敵です」

メイド「しかし、女性器の方はそうではありません」

勇者「でも無敗なんですよね？」

メイド「それはこの世界の男性が弱いからです」

勇者「男性が弱い？」

メイド「気付いているかと思いますが、この世界の兵士は全て女性です」

メイド「それは男性が女性の1割程度の力しか持っていませんからです」

勇者「なるほど」

メイド「ゆえにセイも男性を舐めているんですよ。無敵の男性器に比べて感じ易い女性器で相手しているのがその証拠です」

勇者「そしてそれでも無敗だから油断しているんですね」

メイド「勇者様がセイに性交を要求すれば簡単に通るでしょうね」

勇者「……と言うか俺が勇者なのって、」

メイド「この世界より強い異世界の男性の中でも性器が大きく精力も強かったからです」

勇者「……そうですか」

メイド「実際、勇者様の性器はセイのそれより大きい筈です」

勇者「まあ、確かにそうですね」

メイド「つまり、勇者様は女性相手に無敵の力を発揮する最強の剣を持っているのですよ」

勇者「剣て……」

メイド「それでセイを貫いてきてくれませんか……?」

勇者「……………」

メイド「……………」

勇者「メイドさんはどうしてセイを倒したがつているんですか?」

メイド「……………」

勇者「メイドさんは女王様に恨みがあるはずですよ」

勇者「なら寧ろ、セイは仇を討ってくれた人なんじゃないですか？」

メイド「……………」

メイド「確かに、私は陛下が嫌いです」

勇者「……………」

メイド「でも、セイはもつと嫌いなんです」

勇者「どうしてですか？」

メイド「彼女は女性をイカせる時に無理矢理レイプするからですよ」

勇者「……………」

メイド「これまで何人もの姫達がセイに処女を散らされてきたと聞きます」

勇者「それは……確かに酷いですね」

メイド「はい。処女は生涯愛する男性に捧げるものです」

メイド「あの陛下でさえ大切に守っていました」

勇者「女王様、処女だったんですか……」

メイド「陛下の股から血が出ていることに気付きませんでしたか？」

勇者「そういえば……」

メイド「きつと、陛下の心が折れたのは処女を散らされたからだと思います」

勇者「……陛下、涙流してましたね」

メイド「はい。セイは女性の敵です」

勇者「同感です」

メイド「だから勇者様!どうかセイを倒して下さい!彼女が大陸を支配すれば、何人も女性が不幸になります……!」

勇者「……」

メイド「勇者様……!」

勇者「……すみません、メイドさん。俺にはセイを倒す自信がありません……!」

メイド「な、なぜですか?勇者様は最強の剣を持っているんですよ……!」

勇者「それでも無理です……俺、童貞なんです」

メイド「!」

勇者「いくら最強の剣でも、使い手が素人じゃガラクタですよ……」

メイド「……なら、素人じゃなくなればいいんですよ」

勇者「え?」

メイド「大陸最高の英雄が、誰も使った事のない練習場で鍛えてあげます」

勇者「練習場……?」

メイド「……」

勇者「メ、メイドさん?!下着を脱いでどうしたんですか!」

メイド「……………見て下さい勇者様」

勇者「な!？」

勇者「ス、スカートを捲つちやダメですよ!み、見えます!」

メイド「見て下さい!」

勇者「!」

メイド「私の未使用のここで、勇者様を鍛えます」

勇者「……………(ゴクリ)」

メイド「こうしたらよく見えますか?」

勇者「ク、クパアだ…」

メイド「勇者様専用です」

勇者「メ、メイドさん……………で、でもさつき、処女は愛する人について言つてたじゃない

ですか…!」

メイド「ふふ…」

勇者「……………」ドキッ

メイド「勇者様のこと……………私、嫌いじゃないですよ…////」

勇者「……………メイドさんは、ズルいです」

メイド「私はもう勇者様を生涯愛する用意はすみましたよ」

勇者「……………わかりました」

勇者「俺も、腹をくくります」

メイド「勇者様……」

勇者「最強の剣、味わってみてください……」

メイド「ふふ……。勇者様を一晩で最強の戦士にしてみせます……／＼」

勇者「メイドさん……」

メイド「勇者様……」 チュツ ♡

勇者「……………そう言えばメイドさん。俺を鍛えるのつて主に敵対することになるんじゃないやあ
りませんか？」

メイド「おかしなことを言いますね、勇者様」

メイド「ただ……」

「……気になる男性と愛し合うだけじゃないですか♡」

完